



地域医療ネットワークの会

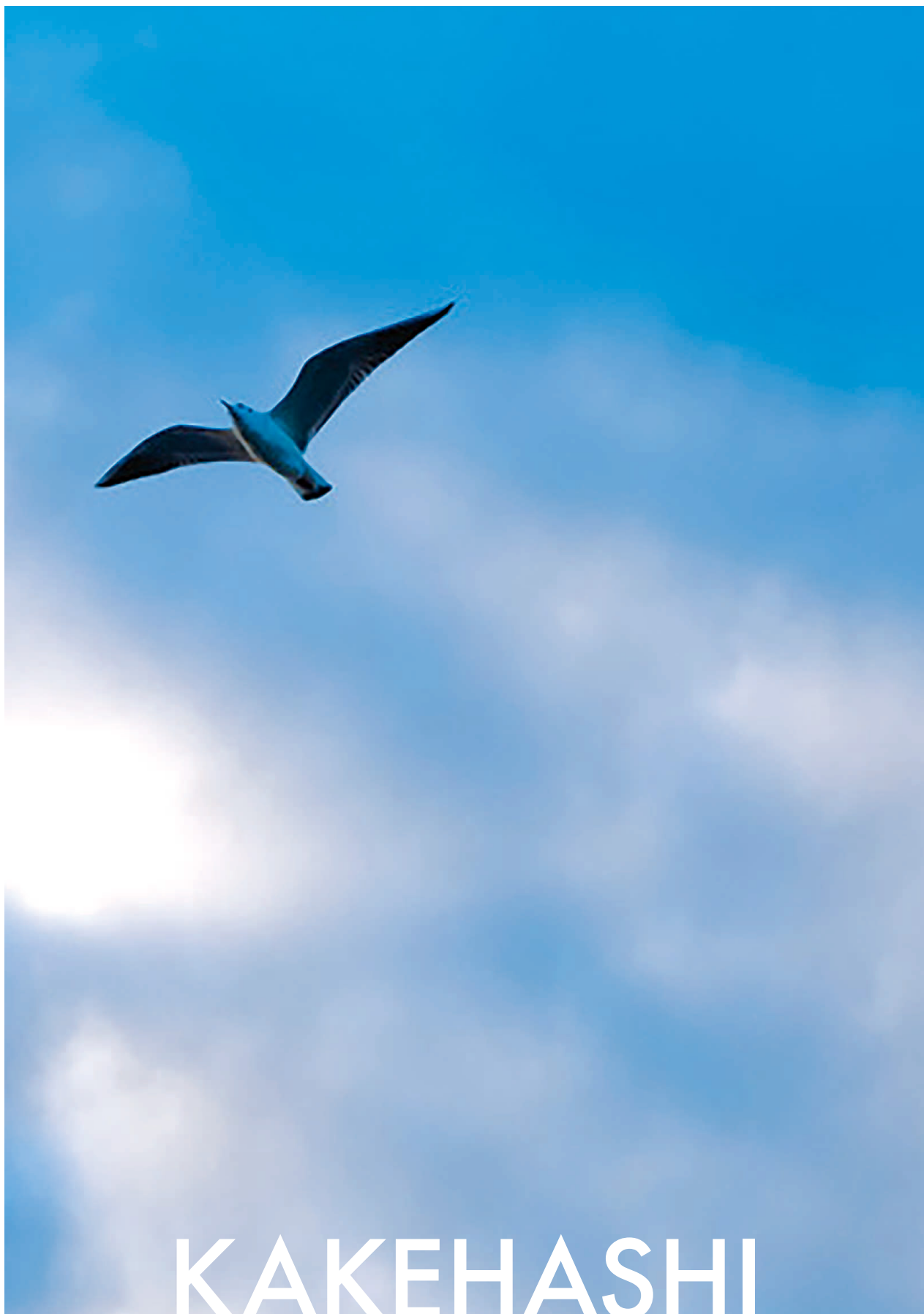


Photo by
watanabe hiloyuki

KAKEHASHI
30th Anniversary

「地域医療ネットワークの会」 30回までの歩み

まだこの地域で今のように在宅療養へスムーズにつなぐことが難しかった頃、この地域医療ネットワークの会は「顔の見える地域連携」を目指し、同じ思いを持つ世話人の方々の支えで活動が開始されました。

今では様々な地域でこうした会が発足されておりますが、2007年(平成19年)と比較的早い時期から“地域で暮らす人々を支えるにはどのようにしたらいいのか”と回を重ね10年が経過し、30回を迎えることができました。

少人数の事例検討から開始したこの会も、その時々 of 病院や地域で抱える課題を多職種で考え、それぞれの“知”を出し合い、この地域でどのように支えていくことができるのか、その方策を多職種で見出しています。現在は年3回開催し、参加者からのご意見・ご希望を頂きながら世話人で集まり、毎回どのようなテーマ・形式での開催が良いか企画を練っております。過去の開催の中では第19回にそれまでは多職種で構成されたグループワークの開催でしたが、この回は「地域には頼りになるいろいろな職種がいる。さあ！わたしたちの力を発揮しよう。」をテーマに、同じ職種・専門分野毎のグループ分けとなり、事例を基にその専門性を発揮すべく熱い会であったことを記憶しております。自分たちの職種ではこんな関わりができる、この職種の人たちと連携するとこんな力を発揮できるとの力強い発表を聞き、この地域には地域を支える、たくさんの方々がいることを再確認し、病院スタッフとしては安心して退院を後押しできることを強く感じた回でした。この事は私ばかりでなく、参加されている皆様からも、この会を通じて支援の輪が広がり、困った時にはどの事業所どの職種に相談したらいいのかを知る機会となったと聞いております。

今では多施設・多職種のたくさんの方々から参加のご希望を頂き、会場確保など運営上の課題はまだまだありますが、会の趣旨に賛同して下さる皆様の支えがあってこそ、この会の存続の意味があるかと思っております。地域包括ケアシステムの一助となるよう、「つなぐ」そして「支える」この地域に暮らしてよかったと思えるような支援が行えるよう、今後も発展した会になることを願い、今回は第30回までを振り返ってみたいと思います。



地域医療ネットワークの会 世話人
保科 かおり



「地域医療ネットワークの会」 記念誌発行によせて

地域医療ネットワークの会30回開催記念誌「KAKE-HASHI 30h」の発行に際して、まずはお挨拶申し上げます。平成26年4月より世話人代表を務めさせていただいております、聖マリアンナ医科大学メディカルサポートセンター副センター長の井上健男と申します。おかげさまで、本会はこの度、めでたく第30回目を開催させて頂くことができました。この記念すべき会を、代表として迎えられ、大変光栄に思っております。

さて、地域医療ネットワークの会は「顔の見える地域連携」として、近隣の病院・診療所・訪問看護・地域包括支援センター・居宅介護支援事業所などがお互いに情報交換し、地域医療の向上を目的に発足しました。その、第1回目は平成19年11月15日に開催され、参加者は7施設、34名でした。その後、約10年の月日を経て、今回の第30回目の参加者は40施設、120名と着実に成長を遂げております。このように飛躍的に発展することが出来たのも、本会の趣旨にご賛同いただいております皆様方のご尽力の賜物であり、この場をお借りいたしまして心より御礼申し上げます。今後も、引き続き「顔の見える地域連携」としての地域医療ネットワークの会に、皆様方のご支援とご協力のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

地域医療ネットワークの会 世話人代表
井上 健男



第30回の記念写真

CONTENTS

「地域医療ネットワークの会」30回までの歩み	
保科 かおり	1
「地域医療ネットワークの会」記念誌発行によせて	
井上 健男	2
沿革	3
地域医療ネットワークに参加して	
第16～30回	5
参加のことば	13
「地域医療ネットワークの会」会則	15
おわりに	
渡邊 寛之	18
編集後記	
丹下 みつる	18

沿革

年	月日	テーマ	参加施設	参加者
2007	11.05	第1回 「胃癌終末期にある患者が、入院から自宅療養へ移行したケースについて」 地域医療ネットワークの会発足	7施設	34名
2008	2.05	第2回 「在宅での看取り」「地域医療連携について」	12施設	44名
	5.29	第3回 「慢性呼吸不全・心不全で入院退院を繰り返していたが、地域の在宅診療・看護サポートを得て 自宅療養の継続が可能となった症例について」 地域医療ネットワークの会 会報 創刊	10施設	55名
	9.02	第4回 「ハンディキャップを持つ子ども達の療養を考える」 「ち☆ネット！」ロゴ完成	18施設	60名
	11.26	第5回 「高齢者の生活を考える」	16施設	50名
2009	2.28	第6回 「胃瘻の最新情報と地域で抱える問題点」	45施設	104名
	7.14	第7回 「腹膜透析患者の症例検討」 正義の味方 ち☆ネットマン デビュー	10施設	54名
	11.27	第8回 「ALSの在宅医療について」	10施設	52名
2010	3.2	第9回 「糖尿病患者の在宅療養を考える」	37施設	87名
	7.27	第10回 「事例を通して退院前カンファレンスを考える」	14施設	66名
	11.13	第11回 「どこまでできる？在宅療養」	37施設	117名
2011	2.08	第12回 「急性期病院から、回復期リハビリテーション病院を経て自宅復帰した脳卒中患者ケース」	5施設	60名
	6.16	第13回 「2011年3月11日 東日本大地震。その時私たちは… ～地域医療をささえる私たちが対応したこと、できること～」	72施設	185名
2012	1.14	第14回 「終末期はがんだけじゃない あなたならどうする？」	43施設	94名
	5.25	第15回 「腹水貯留のある末期がん患者への関わり」	12施設	60名

年	月日	テーマ	参加施設	参加者
	9.29	第16回 「さまざまな生活困窮を抱える高齢者の療養を考える」	35施設	85名
2013	1.31	第17回 「地域で外来がん化学療法中の患者を支えるために」	31施設	95名
	5.3	第18回 「事例を通して考える ～インスリン・認知症・独居～」	25施設	72名
	9.28	第19回 「地域には頼りになるいろいろな職種がいる。 さぁ！わたしたちの力を発揮しよう。」	30施設	79名
2014	3.12	第20回 「地域で高齢透析患者を支えるために」	32施設	79名
	5.21	第21回 「リハビリテーションと地域支援～退院後のリハビリを含めた地域での支援～」	32施設	86名
	9.27	第22回 「医療と介護の連携はむずかしい？ ～本音を吐きだそう～」 サイボウズ 勧誘・登録開始	74施設	132名
2015	3.12	第23回 「生活保護・独居の高齢者をどう支えていけるか」	22施設	83名
	5.01	第24回 「当院の心不全チームの活動について ～高齢者心不全におけるチーム医療の重要性～」	46施設	155名
	9.26	第25回 「これって本当に老衰？ ～加齢に伴う心身能力の衰えは予防できる？回復できる？～」	33施設	80名
2016	3.2	第26回 「事例を通して考える ～急速に変化を起こした肺がん末期の在宅移行～」	23施設	65名
	6.21	第27回 「高齢化社会 何がおきているの？ ざっくばらんに話し合おう」	23施設	69名
	10.29	第28回 「意思決定って誰がするの ～それぞれの立場でできること～」	32施設	74名
2017	3.8	第29回 「急性期医療から、在宅での生活。関係機関のバトンの受け渡しを振り返ろう」	11施設	52名
	6.15	第30回 「糖尿病患者の在宅支援」	40施設	120名

地域医療ネットワークに参加して

第16回地域医療ネットワークの会

2012.09.29.

「さまざまな生活困窮を抱える高齢者の療養を考える」

～これから増える問題に向き合おう～

全大会 進行：地域医療ネットワークの会世話人／渡邊 寛之
：地域医療ネットワークの会世話人／桑島 規夫

疾病・家族背景・経済面など様々な問題を抱える事例をもとに10グループに分かれて話し合いました。

アンケート結果(アンケート対象者：73名／回収率：82%)

	「はい」	「いいえ」	未記入
本日の内容は、良かったですか	59名	0名	1名
事例をもとに多職種でグループワークをしたことは、良かったですか	57名	0名	3名

フリーコメント(抜粋)

- ・多職種の具体的な意見が聞けて、参考になり良かったです。
- ・事例以外にも支援困難なケースがおおくあるので、視野が広がりました。
- ・事例に近い現状が実際訪問している家にあり、決して少なくない、これから多くなる事を改めて実感した。



第17回地域医療ネットワークの会

2013.01.31.

「地域で外来がん化学療法中の患者を支えるために」

「消化器がんの外来化学療法と副作用の対応」 聖マリアンナ医科大学病院 腫瘍内科 教授／朴 成和

外来で化学療法を受けているがん患者が増えており、可能な限り日常に近い時間を少しでも長くすることで、「自分のしたいこと、すべきこと、できること」の時間が作れるよう、外来での化学治療を行っているとお話がありました。そのような環境で患者さんや、その家族が症状や副作用などに対して不安を最小限に出来るよう、精神面のサポートを含め、化学療法治療中段階から地域医療関係者の方々との関わりを、希望されているとお話がありました。講演後、化学療法を実施している腫瘍センターの見学をしました。

アンケート結果(アンケート対象者：95名／回収率：83%)

	とてもよくわかった	よくわかった	あまりよくわからなかった	わからなかった	未記入
外来がん化学療法の治療方針について	24名	50名	3名	0名	2名
抗がん剤治療の意義について	33名	44名	0名	0名	2名
抗がん剤治療の副作用症状について	18名	52名	7名	0名	2名
副作用の予防と対処方法について	15名	50名	11名	0名	3名

フリーコメント(抜粋)

- ・朴先生の切除不能患者様の「生きる意義」を前提としての治療のすすめをなさっている事に感じいりました。
- ・抗癌剤開始し1～2週間が、一番不安が強いことがわかった。安心できるような言葉かけ1つでも大分違うことがわかった。
- ・私は、事務ですが、利用者さんから病状についての不安なので相談があります。その時どう対応をするのがベストなのか考えさせられる場面が多いので、今日の話は参考になりました。



第18回地域医療ネットワークの会

2013.05.30.

「事例を通して考える～インスリン・認知症・独居～」

座長：地域医療ネットワークの会世話人／西川 真人
聖マリアンナ医科大学病院 メディカルサポートセンター／行田 菜穂美
聖マリアンナ医科大学病院 代謝内分泌内科／永井 義夫

糖尿病の治療の現場は病院ではなく自宅とその周辺であるという話があり、地域包括支援センターとの情報共有や、小規模多機能型施設での介護について等、全体でのディスカッションができました。

アンケート結果(アンケート対象者：60名／回収率：73%)

	「はい」	「いいえ」	未記入
本日の内容は、良かったですか。	44名	0名	0名

フリーコメント(抜粋)

- ・高齢者にとって医学的に正しいことが、本人にとってハッピーとは限らないとの先生の回答。うなづきながら聞きました。
- ・病院でできる事、課題が明確になったと思います。
- ・地域医療というのに関しては分かっていない部分も多かったので非常に勉強になりました。



第19回地域医療ネットワークの会

2013.09.28.

「地域には頼りになるいろいろな職種がいる。 さあ！わたしたちの力を発揮しよう。」

全大会 進行：地域医療ネットワークの会世話人／坂本 由恵
：地域医療ネットワークの会世話人／桑島 規夫

同じ職種・専門分野毎のグループ構成にし、事例をもとに自分の職種や所属のチームがどのようなことをできたのか、自分たちの「強み」や「他職種と連携した場合にこんな力を発揮できる」ということを話し合いました。グループワークでの話し合いでは、「リハビリ命」「お薬飲めたかな？」など、職種ならではのグループ名も考えてもらいました。

アンケート結果(アンケート対象者：68名／回収率：66%)

	「はい」	「いいえ」	未記入
本日のテーマは、良かったですか。	45名	0名	0名
事例をもとに、多職種でグループワークをしたことは、良かったですか。	44名	0名	1名

フリーコメント(抜粋)

- ・グループワークをすると、同じ職種でも色々な考え方が出来て参考になります。
- ・同一事例でも職種が違ふことで、視点を変えて利用者を捉え、関わり方を考えることができた。



第20回地域医療ネットワークの会

2014.03.12.

「地域で高齢透析患者を支えるために」

座長：地域医療ネットワークの会世話人／木村 健二郎
「最新の透析治療・病院と地域医療機関との連携」 聖マリアンナ医科大学病院 腎臓高血圧内科／櫻田 勉
「透析機器取り扱いの実際」 バクスター株式会社 横浜ビジネスセンター／長沼 智佳子
テルモ株式会社 横浜支店／葛西 一 峰
「透析患者に対するケアの実際」 聖マリアンナ医科大学病院 腎センター／神山 明 子

糖尿病患者や腎硬化症患者の増加から末期腎不全患者数も増えており、透析導入患者も60歳以上が80%以上を占めていること、在宅透析医療普及のためには地域の開業医や往診医・訪問看護師の協力が必要であるという説明がありました。また、腹膜透析(PD)患者の自宅での生活の様子や支援体制、患者の生活習慣の特徴に合わせたケアの実際について具体的に説明されました。全体討議では、実際に在宅で受け入れができるかという視点でディスカッションされました。

アンケート結果(アンケート対象者:65名／回収率:82%)

	「はい」	「いいえ」	未記入
テーマは良かったですか	52名	0名	1名

フリーコメント(抜粋)

- ・在宅医療を望む患者に対し、各機関の各職種の役割分担を考えるきっかけになった。
- ・最近の動向も聞け、学習すべき点が明確になった。これから多くなる事を改めて実感した。



第21回地域医療ネットワークの会

2014.05.21.

「リハビリテーションと地域支援～退院後のリハビリを含めた地域での支援～」

社会福祉法人 川崎市社会福祉事業団 川崎市北部リハビリテーションセンター
百合丘障害者センター 在宅支援室 室長／安保 博

川崎市北部を管轄している「川崎市北部リハビリテーションセンター」の概要や支援内容が紹介されました。また「在宅リハビリテーション事業(市単)」と「地域リハビリテーション」について、事例を基により具体的な支援(活動)が発表され川崎市北部リハビリテーションの役割を再認識することができました。全体討議では就労支援や制度利用の狭間にある方の支援や退院支援における具体的な方法など、幅広い内容について意見交換が行われました。

アンケート結果(アンケート対象者:70名／回収率:99%)

	「はい」	「いいえ」	未記入
内容は良かったですか	67名	0名	2名

フリーコメント(抜粋)

- ・見えない事、知らない事(就労支援等)が知れてよかった。
- ・地域に戻った後の支援について、具体的な事例を通しアプローチ方法を知る事が出来た。



第22回地域医療ネットワークの会 2014.09.27.

「医療と介護の連携はむずかしい?～本音を吐きだそう～」

全大会 座長:地域医療ネットワークの会世話人／西川 真人
:地域医療ネットワークの会世話人／荻原 美代子

「他職種の仲間から生まれた本音や方向性を分かち合おう～」という趣旨で、参加者が19グループに分かれ、医療と介護の連携について、それぞれの立場で大切にしていることなどを直接話すことができました。全体討議では、医療と介護の連携が難しい理由の一つとして、介護職がどのような役割を担えるかを医療職が知らないなど業種への理解について、また、それぞれの視点が少しずつ違うため、連携の難しさになっているのではないかなど等話がありました。

アンケート結果(アンケート対象者:118名／回収率:65%)

	「はい」	「いいえ」	未記入
テーマは良かったですか	72名	0名	5名
事例をもとに、多職種でグループワークをしたことは、良かったですか	73名	0名	4名

フリーコメント(抜粋)

- ・在宅で患者さんや家族を支えている方々と直接話ができてよかった。自分の枠が広がった。
- ・医療と介護では患者さん(利用者)に対する視点が違い、どこにお互い気を付けるべきかの意見交換ができ学ぶ事も多く発見できた。
- ・現在の役割・専門職としての位置。母体のできる、できないことの内容紹介。困りごとなど発信、提案できよかった。



第23回地域医療ネットワークの会 2015.03.12.

「生活保護・独居の高齢者をどう支えていけるか」

座長:地域医療ネットワークの会世話人／丹下 みつる
複合型サービス ナーシングホーム岡上／林田 菜緒美

区役所高齢支援担当・生活保護ケースワーカー、地域包括支援センター相談員、居宅支援専門員、大学病院医師など、様々な職種 計83名の参加がありました。事例検討とそれぞれの立場でできること、やらなくてはならないことの熱い討議を行いました。

アンケート結果(アンケート対象者:68名／回収率:88%)

	「はい」	「いいえ」	未記入
本日の内容は、良かったですか	56名	0名	4名

フリーコメント(抜粋)

- ・正直びっくりした。TVでみる独居・生保の悲惨なイメージしかなくこれだけの手厚い包括支援を初めて知った。この事例の最後の行政の関わり方も知りたかった。本人の意思尊重・個人情報守秘義務の壁などとても参考になった。
- ・複合型サービスの多職種チーム連携による在宅患者への関わりにより生活質が上がったことやサービス内容が理解できた。



第24回地域医療ネットワークの会 2015.05.01.

「心不全教育セミナー」

講演1

座長:聖マリアンナ医科大学病院 ハートセンター 師長/塚本 孝枝
「当院の心不全チームの活動について」 聖マリアンナ医科大学病院 慢性心不全看護認定看護師/倉田 浩

講演2

座長:聖マリアンナ医科大学病院 循環器内科 教授/明石 嘉浩
「高齢者心不全におけるチーム医療の重要性」 聖マリアンナ医科大学病院 循環器内科 講師/木田 圭亮

この会は、聖マリアンナ医科大学病院「心不全チーム」が新たに行う「心不全教育セミナー」を、院内及び地域の皆様方に広く活用して頂けるきっかけとなればと考え、地域医療ネットワークの会が共催となり一緒に開催いたしました。講演では、地域住民の高齢化に伴い、心不全患者も増加することが想定されると説明がありました。心不全患者の再入院を予防するためには退院後の生活管理が大切であり、地域との連携が重要であるという話がありました。

アンケート結果(アンケート対象者:135名/回収率:85%)

	「はい」	「いいえ」	無回答
本日の内容は、良かったですか	108名	0名	6名

フリーコメント(抜粋)

- ・病院の心不全チームの連携・システム・取組みが詳しく分かって良かった。
- ・施設職員として心不全利用者に対し適切な対応が出来るための知識不足を感じた。今後増えていくであろう入所者にチームとして対応していく必要性を感じました。



第25回地域医療ネットワークの会 2015.09.26.

「これって本当に老衰?～加齢に伴う身体能力の衰えは予防できる?回復できる?～」

ショートレクチャー 座長:地域医療ネットワークの世話人/西川 真人
「虚弱高齢者の見つけ方と予防方法」 聖マリアンナ医科大学病院 リハビリテーション部/小山 真吾
「栄養面からのサポート」 聖マリアンナ医科大学病院 栄養部/柴田 みち
全大会 座長:地域医療ネットワークの会世話人/西川 真人
:地域医療ネットワークの会世話人/林田 菜緒美

高齢者を地域で支えていく中で、「この状態は『老衰?』なのか、『廃用?』なのか」と考えることが多くあるという話題から開催しました。ショートレクチャー後、参加者が10グループに分かれ、日頃支援している高齢者の状況を「フレイル」と捉えるのか、「サルコペニア」と判断するのか、また、どのような支援を提供することが必要なのかなど、活発な意見交換が行われました。全大会での共有後、地域でより早く発見や予防ができるように、地域包括支援センターの取り組みの紹介や、薬剤師の居宅訪問の活用、管理栄養士の在宅指導への期待についてなど、幅広い意見が活発に行われました。

アンケート結果(アンケート対象者:65名/回収率:64%)

	「はい」	「いいえ」
本日のテーマは良かったですか	42名	0名
事例をもとに、多職種でグループワークをしたことは、良かったですか	41名	1名

フリーコメント(抜粋)

- ・フレイル・サルコペニアについて改めて勉強になりました。実際の訪問時、診断に活かしていきたいです。
- ・多職種でディスカッションでき、自分の知らないことや考えていない事が意見交換でき今後の仕事に活かせる機会であった。



第26回地域医療ネットワークの会

2016.03.02.

「～急速に変化を起こした肺がん末期の在宅移行～」

座長：地域医療ネットワークの会世話人／井上 健 男

：地域医療ネットワークの会世話人／齋藤 祐 子

「肺がん治療の概要と予後について・事例紹介」 聖マリアンナ医科大学病院 呼吸器内科／尾上 林太郎

「メディカルサポートセンターによる支援について」 聖マリアンナ医科大学病院 メディカルサポートセンター／丹下 みつる

「訪問看護師の支援について」 訪問看護ステーション長沢ひまわり／坂本 由 恵

「訪問診療医より」 稲田登戸クリニック 在宅支援診療所／松本 秀 平

Best Supportive Careとなった際、外来と病棟看護師の連携、早期からの訪問診療看護などの導入、外来主治医と訪問診療の密接な関係性が大事という認識はあるものの、日常生活は自立していると医療者から患者家族へ訪問診療など説明しづらい。かかりつけ医が必ずしも訪問診療できるとは限らない、訪問診療と外来医師との兼ね合いも難しく、患者によっては、見捨てられた感にもつながる。など色々な意見がありました。また、在宅・病院の医療者同士、患者・家族・医療者(在宅、病院)同士、やはり、face To faceが安心できる！大事！と再認識し、患者・家族にとってよい支援ができるよう、色々な意見や将来の思いを語った会になりました。

アンケート結果(アンケート対象者:51名／回収率:84%)

	「はい」	「いいえ」	無回答
本日の内容は、良かったですか	41名	0名	2名

フリーコメント(抜粋)

- ・ 末期の在宅への連携の難しさを感じる。関係者がそれぞれの思いを素直に意見交換できる事はいい場と思いました。思いを直接聞かせて頂けたことが良かったです。
- ・ 在宅での看取りについていつも早く出来ればと病棟看護師として感じていた。今回、在宅移行への困難な部分がよく理解できたので病棟の看護師として最期に関する話をもっとできたら早期介入につながると思いました。



第27回地域医療ネットワークの会

2016.06.21.

「高齢化社会 何がおきているの？ざっくばらんに話し合おう！」

座長：地域医療ネットワークの会世話人／荻原 美代子

「救命センターへ搬送されてくる高齢患者、家族の状況」 聖マリアンナ医科大学病院 救命救急センター／森澤 健一郎

「家で暮らしている高齢者の現状」 鷲ヶ峯地域包括支援センター 相談員／宮下 容 子

救急搬送されてくる高齢者の死生観・家族の意向に変化が見られており、救急搬送したが結果延命治療を望まなかったという現状、日常生活で子供たちに迷惑をかけたくないという心情から子供たちの介入を希望しないなど具体的な話が聞けました。また、多重問題を抱えている高齢者も増えており、より高齢者支援を複雑にしていることもわかりました。全体意見交換会では孤独死の実状について情報交換されました。

また、地域包括ケアシステム構築のための行政の取り組みについて説明がありました。

アンケート結果(アンケート対象者:56名／回収率:84%)

	「はい」	「いいえ」	「普通」	無回答
本日の内容は、良かったですか	44名	0名	1名	2名

フリーコメント(抜粋)

- ・ それぞれの困り事は見ている。家族の対応や説明についてはみなさん迷っている。
- ・ どのタイミングで最後の対応の話をするのかとても悩ませるが、1回の話では理解は難しいと思った。
- ・ 川崎市の救命の現場のお話、地域での生活の話など、一見正反対の様で密接につながっていると感じました。



第28回地域医療ネットワークの会 2016.10.29.

「意思決定って誰がするの～それぞれの立場でできること～」

座長：地域医療ネットワークの会世話人／桑島 規 夫
地域医療ネットワークの会世話人／行田 菜穂美

第27回で、治療や療養場所、生き(逝き)方に意思決定を求められるということが話題となりました。

そこで、多職種でのグループワーク後、全大会でディスカッションを行いました。意思決定をするための過程が大切、短時間で決定できるものではなく、一度決定しても、変更があっても良い。決定するために、必要な具体的な情報を、私たちは専門職として伝えていく役割がある。縦横のネットワークを図り、本人と家族が満足のいく意思決定ができるように支援していきたいと認識した会でした。

アンケート結果(アンケート対象者：61名／回収率：81%)

	「はい」	「いいえ」	
本日のテーマでの意見交換は今後の活動に活かそうですか？	50名	0名	
グループワークについてお答えください	「はい」	「いいえ」	無回答
①グループワークでは意見交換が十分できましたか？	49名	0名	1名
②自分の意見を伝えることができましたか？	49名	0名	1名
③グループワークの時間は適切でしたか？	47名	2名	1名



フリーコメント(抜粋)

- ・介護度が高くなればなるほど本人の意思決定が難しくなることが多い。元気な頃から意思決定に至るまで繰り返し様々な職種が関わりサポートすること連携していくことが大切だと分かったので今後も地域で話していく機会を作っていけたらと思う。



第29回地域医療ネットワークの会 2017.03.08.

「急性期医療から、在宅での生活。関係機関のバトンの受け渡しを振り返ろう。 脳出血後の青年が発症から数年経過し、今、新たな目標を掲げてリハビリテーションに励んでいる」

座長：地域医療ネットワークの会世話人／坂本 由 恵
：地域医療ネットワークの会世話人／永田 ノリ子

「脳出血発症後、そして、生命の危機を脱したとき 僕らはこう考えた」 聖マリアンナ医科大学病院 脳神経外科／内田 将 司

「在宅療養を願う両親の想いは、叶えられるのか」 七沢リハビリテーション病院脳血管センター／境 純 子

「地域で安心して生活するために～本人と家族の想いに寄り添って～」 地域相談支援センター柿生／龜山 正 敏

「退院後の地域生活と川崎市北部リハビリテーションセンターの関わり」 川崎市北部リハビリテーションセンター百合丘障害者センター／安保 博 史

脳出血発症後は、急性期から回復期、そして慢性期医療及び、生活を支えるそれぞれの関係機関へスムーズにバトンを渡し、患者と家族を支えることが重要です。若年者の場合、高齢者とは異なる様々な問題も生じます。今回、支援にあたった機関が、それぞれの専門性を発揮し、次の専門機関へバトンを受け渡した経過を振り返りました。本人だけではなく、特に家族の気持ちを地域の支援者が受け止め、共有しながら、共に支えることができたことも、本人や家族が目標に向かってすすむことができた要因のひとつであると話されました。

アンケート結果(アンケート対象者：40名／回収率：77%)

	「はい」	「いいえ」
本日の内容は、良かったですか	31名	0名



フリーコメント(抜粋)

- ・在宅への環境設定等、入院中に解決しなくても繋ぐことの大切さを学ばせて頂きました。
- ・急性期医療～地域での関わりを実際のケースを通してお話を聞く貴重な会となりました。
- ・「家族力」の重要性本人・家族を支援するための様々な資源の連携の重要性について再確認することが出来ました。



第30回地域医療ネットワークの会 2017.06.15.

「糖尿病患者の在宅支援」

座長:地域医療ネットワークの会世話人／林田 菜緒美

地域医療ネットワークの会世話人／行田 菜穂美

「インスリンの最新治療と在宅生活」 聖マリアンナ医科大学病院 代謝・内分泌内科医／石井 聡

「インスリン注射と介護保険」 フレンド神木地域包括支援センター 保健師／石黒 愛

「インスリン治療中の方への訪問看護～自己注射の支援を通して～」 よみうりランド訪問看護ステーション 訪問看護師／瀬野 匡 代

インスリン治療が必要な高齢者に、どのような治療薬が選択され、どのような地域の支援を受けているのか、という話を聞いたうえで、それぞれの立場で意見交換をしました。外来では残薬のことや生活状況を把握するには限界があるため、医療機関と訪問看護やケアマネジャーが情報を共有する必要性を再認識した会でした。現在、患者・家族と医師、看護師のみがインスリン注射を行う制度になっていますが、薬剤師や日々訪問するヘルパーたちもそれぞれの立場で何をすることが出来るのか、地域でも多くの人が関心を持って声を上げていき、制度として少しでも後押しできれば、という発言もありました。

アンケート結果(アンケート対象者:105名／回収率:90%)

	「はい」	「いいえ」	無回答
本日の内容は、良かったですか	90名	1名	4名

フリーコメント(抜粋)

- ・インスリンの最新医療について把握でき、血糖コントロール目標について再認識できた。介護保険についてヘルパーのインスリン介助内容について知れて良かった。
- ・ご高齢で自己注射が出来ない方、認知症の方、精神障害のある方等のインスリン療法に対応する方法がある事が分かり希望が持てました。訪問看護で支えられる対象者が増えると思います。



地域医療ネットワークの会に関する意見

- ・ますます地域医療ネットワークが必要となってくるのは確実なので、今後も継続して頂き、参加したい。
- ・患者に出会ったとき、地域で誰に相談したらよいかわかることが地域ネットワークの意義を感じます。
- ・各職種の特徴や役割がわかった。今後連携がしやすくなります。
- ・いろいろな部内の方々の意見を聞くことが出来ました。勉強になりました。
- ・どうどうと医療・介護・行政ごちゃまぜでグループを行える、北部唯一の場だと思います。これからも継続をお願いします。
- ・他の方と知り合う機会が取り入れられており、今後に繋がると思いました。
- ・医療職の方に直接質問ができ、回答がもらえたことがよかった。
- ・視野が広がります。特に医療職の方の立場が本音で聞くことが出来ました。
- ・普段話が聞けない病院の医師と話が出来ました。
- ・グループワークは顔の見える関係づくりに役立ったため、今後もお願いします。

フリーコメントの抜粋ではありますが、皆様からたくさんの温かいお言葉を頂戴いたしました。この他、会に対する要望などのご意見も会の運営において参考にさせていただきます。

地域医療ネットワークに参加して

JCHO東京高輪病院 院長
木村 健二郎



私は平成26年8月末で13年間勤めた聖マリアンナ医科大学を退職し、現在のJCHO東京高輪病院に勤務しています。急性期病棟と包括ケア病棟をもつ中規模病院です。地域医療構想を踏まえた地域連携をどのように構築すれば良いか日々試行錯誤の毎日です。そのような中で、「地域医療ネットワークの会」がいかに地に足をしっかりとつけた地域活動になっていたかを再認識し、改めて素晴らしい会だったと思い出します。地域医療を支える看護師、ケアマネジャー、医師が一堂に会して、一つのテーマに沿って意見交換をする貴重な機会だったと思います。このような会を通じて顔の見える関係を築くことが、地域医療を充実させる基礎となることを実感しました。ますます、本会が発展し地域医療が充実することを願っています。

ジャパンケア川崎南生田小規模多機能 管理者
下岡 弘文



「ち☆ネットの会」に招かれて、多くの方々との出会いがありました。グループワークや事例の発表では多くを学ばせて頂きました。この出会いと学びは、小規模多機能型居宅介護サービス提供の現場に活かされています。今後も、地域の「医療・福祉・介護」の連携・支援の輪の一助を担う事業所でありたい、と切に願っております。

二子薬局はなえケアステーション ケアマネージャー
荻原 美代子



会に参加させていただき、最近、ようやく感じたことがあります。初めは、地域の方々の顔もわからず、ただ、参加しているだけでしたが、重ねるごとに事例提供者や意見交換される方の職種・人柄・考え方を知ることができ、困ったときは、「あの人に相談しよう」と顔が浮かびます。地域で繋がり、人と結び、連携の輪ができるのが「ち☆ネットの会」ですね。

クオール株式会社 たちばな薬局 薬剤師
長澤 敬輔



患者様宅に伺うことで初めて実際の薬の管理状況を知り、窓口ではただ説明をして渡していただけということを実感しました。必要な薬を正しく服用していただくためには多職種との連携が非常に重要であると感じているところです。このような会が途切れることなく更によりよい取り組みへと発展することを心より願います。

聖マリアンナ医科大学病院 本館8階北病棟 看護師
永利 公児



地域ネットワークの会へ初めて参加したきっかけは、当院に来た研修生の指導者として同伴する形で参加であり、この機会にどんなことしているのか覗いてみようかなというくらいの気持ちでした。しかし、参加した時に地域で患者さんを支える医療者のパワーに衝撃を受けたのを覚えています。今までは、このくらいの状態なら間違いなく療養型の病棟へ転院だと思えるような患者さんを上回るような状況でも在宅で支えていることを知り、患者さんが在宅を望んでいるなら、家に帰してもなんとか頑張らうんだと思ったと同時に、地域にはこんなに心強い医療チームがあるんだと思いました。また、この地域ネットワークの会に参加する方はみんなすごく前向きに仕事に取り組んでいる方が多く、今では地域ネットワークの会に参加するたびに、自分も明日から頑張ろうという活力ももらっているように思います。これから地域ネットワークの会には参加します。ち☆ネット万歳!!

訪問看護ステーションゆらりん 所長
林田 菜緒美



世話人に加えていただき、さらに「ち☆ネット」の魅力を感じています。参加者は職種・職場を超えて、今自分たちにできるベストと一緒に考える会。回を重ねて、大学病院と在宅の垣根は低くなり、「このことはあの事業所に相談してみよう」地域に仲間輪も広がっています。更なる発展が楽しみです。

聖マリアンナ医科大学病院
リハビリテーション部 理学療法士

小山 真吾



30回目の開催の由、心よりお喜び申し上げます。地域医療ネットワークの会に参加して、大学病院は急性期に特化するだけでなく「ICUから地域を見据えた医療を提供しなければならない」と深く実感させられました。これからもこの会で得た教訓を活かし、地域の皆様との根強いネットワークを築いていけたらと思います。

医療法人社団昌慶会小野田医院 理事長

小野田 恵一郎



第30回おめでとうございます。今回のグループワークの発表は演劇方式という初の試みでした。まずマリアンナのスタッフにより制作されたビデオを供覧しました。マリアンナの地域医療ネットワークに対する熱意を感じました。また発表は参加者の方の思いがよく出ており、とても面白いものでした。とても勉強になりました。

聖マリアンナ医科大学病院 薬剤部 薬剤師

湊川 紘子



病院薬剤師として働く日々で、地域医療との連携の重要性に気づき参加させて頂きました。地域を支える他職種の方々との交流は非常に勉強になり、皆様の「あつい思い」に刺激を受けました。薬剤師がもっと地域医療に関わっていきように精進していきたいと思います。今後の会の益々のご発展をお祈りしています。

鷺ヶ峯地域包括支援センター 相談員

宮下 容子



色々なテーマについて専門職が意見交換できる貴重な場として楽しく参加させて頂いています。地域包括ケアシステムの構築において「医療と介護の連携」は必要不可欠と考えます。それぞれ活躍できる場の違いもありますが、お互いを知る機会として、学習できる場としてこれからも長くお付き合いができると嬉しいです。

聖マリアンナ医科大学病院 栄養部 管理栄養士

柴田 みち



多施設多職種が医療における様々な課題について、顔と顔を合わせて考え、話すとても有意義な会。30回開催にあたり、会の企画、準備、運営は大変だったと思いますが、会を重ねた分の数えきれない多職種の輪が花となり実を結んでいることと思います。これからも会の益々の発展を祈っています。そして、多くの管理栄養士の参加を期待しています。

聖マリアンナ医科大学病院
メディカルサポートセンター
ソーシャルワーカー

桑島 規夫



地域医療ネットワークの会に参加し、継続していることの「力」を感じます。多くの職種、様々な機関が集まり、真剣に地域医療・社会を考えることが、その「力」の源だと思います。このことは、単に「連携・協働」しているだけでなく、地域を皆さんと「協創」しているのだと考えられます。今後の更なる発展を期待しています。

「地域医療ネットワークの会」会則

第1章 総則

第1条(名称) 本研究会(以下本会と略記する)を地域医療ネットワークの会と称する。

第2章 目的及び事業

第2条(目的) 本会は「顔の見える地域連携」を目指し、病院・診療所・訪問看護・地域包括支援センター・居宅介護支援事業所などがお互いに情報交換できる場の提供・共に学ぶ機会を設け、地域医療を向上させることを目的とする。

第3条(事業) 本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。
定期研究会：原則年3回開催(5月・9月・2月を目処とする)

第3章 会員

第4条(会員) 本会の会員は地域医療に従事し、あるいは関心を持つ当地区の病院・診療所等の医師・看護師・社会福祉士、訪問看護ステーション・居宅介護支援事業所・行政などの医師・看護師・ケアマネジャー・福祉関係従事者で当研究会に賛同するものとする。

第4章 組織ならびに運営

第5条(組織) 1. 本会は、会員より世話人を選出し運営する。
2. 世話人の中より代表世話人を選出する。
3. 世話人は任期を原則2年間とする。
4. 今年度(29年度)の世話人は以下の通り。
代表世話人：井上 健男(聖マリアンナ医科大学病院)
世話人：井上 健男(聖マリアンナ医科大学病院)
有馬 里佳(聖マリアンナ医科大学病院)
宇津宮 薫(聖マリアンナ医科大学病院)
荻原 美代子(二子薬局 はなえケアステーション)
川島 康裕(聖マリアンナ医科大学病院)
桑島 規夫(聖マリアンナ医科大学病院)
行田 菜穂美(聖マリアンナ医科大学病院)
齋藤 祐子(聖マリアンナ医科大学病院)
坂本 由恵(訪問看護ステーション長沢ひまわり)
清野 恵美(聖マリアンナ医科大学病院)
丹下 みつる(聖マリアンナ医科大学病院)
永田 ノリ子(聖マリアンナ医科大学病院)
西川 真人(西川内科・胃腸科)
林田 菜緒美(訪問看護ステーションゆらりん)
保科 かおり(聖マリアンナ医科大学病院)
渡邊 寛之(渡辺クリニック)
世話人兼会計：高田 裕司(聖マリアンナ医科大学病院)

(五十音順)

- 第6条(運営)
1. 研究会で取りあげるテーマにより形式を検討する。
フリーディスカッション形式・グループワーク形式・講演会形式など
 2. テーマに関しては地域の医療関係者にアンケート調査を行い、
ニーズを確認し検討する。
 3. 会の報告は、地域医療ネットワークの会会報「ち★ネット!」をもって
報告する。
 4. 地域医療ネットワークの会会報「ち★ネット!」は
聖マリアンナ医科大学病院HPに掲載する。

第5章 会計

- 第7条(会計・会費)
1. 本会の経費は会費・その他の収入をもって当てる。
 2. 本会の会費は、原則として500円を徴収する。
 3. 本会の会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。
 4. 本会の収支決算は、世話人会の承認と会計監査の監査を経て、
総会で承認を受ける。

- 第8条(会計監査) 本会の会計監事を置き会計監査を行う。

- 第9条(事務局)
- 本会の事務局は下記に置く。
- 聖マリアンナ医科大学病院 メディカルサポートセンター内
- 事務連絡責任者 齋藤 祐子
- 〒216-8511 神奈川県川崎市宮前区菅生2-16-1
- TEL:044-977-8111
- FAX:044-977-8491

第6章 会則

- 第10条(会則の変更) 本会の会則の変更は、世話人会で討議し決定する。

- 第11条(附則)
- | | | | |
|-------------------------|------------|------------|------------|
| 1. 本会則は平成20年7月4日から施行する。 | 7. 一部改訂 | 平成25年7月12日 | |
| 2. 一部改訂 | 平成20年10月6日 | 8. 一部改訂 | 平成26年6月5日 |
| 3. 一部改訂 | 平成21年5月12日 | 9. 一部改訂 | 平成27年4月24日 |
| 4. 一部改訂 | 平成22年5月28日 | 10. 一部改訂 | 平成27年7月2日 |
| 5. 一部改訂 | 平成23年8月29日 | 11. 一部改訂 | 平成28年6月2日 |
| 6. 一部改訂 | 平成24年6月27日 | 12. 一部改訂 | 平成29年4月18日 |



おわりに



とある居酒屋での出来事。引き戸を開けるとカウンターはすでに高齢の先輩方で満席。どこか座れるだろうか、と考えていると先輩方が少しずつつめて「どうぞどうぞ」と席を作ってくださった。「ビールください。」と大将に声をかけた。隣になった男性は日本酒の一升瓶を目の前において、それをご自分でコップに注いでぐいぐいとあおっておられる。ずいぶんお元気な飲み方だなーと感心していると、一杯やらんかね、と声をかけていただいた。僕はビールが入った自分のコップを干してから日本酒をいただいた。89歳で、その店に時々一人で来て、毎回1升瓶を頼み、それを周りの客や大将と飲むのが楽しいのだという。常連さんたちも彼の来店を楽しみにしている。驚いたことに五合ぐらいは自分でお飲みになるそう。その方を囲んで皆よく笑い、よく飲んでいた。ただ、話の繰り返しが多く、かなりの物忘れもあるようだった。気付けば一升瓶は空っぽになっていた。そして「大将、車呼んで」とお帰りの支度を始められた。片麻痺があるようで、皆が手伝った。4点杖を使っているが、僕らの用語では「歩行は見守りレベル」。帰り道は大丈夫かなあと僕は案じていた。しかし帰り際に僕は見事なアップercutを食らった。「明日はデイサービスだからもう寝ないと。」

何らかの問題はあるが、それでも社会に参加し、必要とされている方のお話。僕は、サービス提供側として適切かつ適度な支援とはなにかを再考することになった。疾病や加齢のために認知機能障害や身体機能の障害がある方は「病人」であり、サービスを提供する側が良かれと思って思い描いた療養環境やサービスを受動的にこなしてもらうことが正しいことだと思っていたのではないか。本人が主体的に楽しむということは二の次となっていやしないか。こちら側の安心と労力の軽減を図ることを追及していないか。われわれがサポートすべき主人公は自分の幸福を追求する権利を厳然として持ち続けているご本人たちなのであるという視点が常にあるか。

さて、地域医療ネットワークの会が30回を越えました。
この会を通してこれからも医療サービス提供の本質について多くの方々と考えてゆけることを幸せに思います。今後とも本会をよろしくお願いいたします。

地域医療ネットワークの会世話人
渡邊 寛之

編集後記

前回のKAKEHASHI15thが発行されたのが平成24年10月でした。あれから3年が経ち、この度30回記念誌を発行することが出来たことを心よりうれしく思っております。毎回企画の段階から試行錯誤を重ね、当日まで世話人と事務局スタッフ皆がへとへとになりながらも運営をしておりますが、開催後参加者皆様の笑顔を見ると他では得られないような達成感と充実感を得ることができています。今後も地域医療ネットワークの会が、顔の見える連携における「懸け橋」になりますように皆様と取り組んでいきたいと思っております。

最後に当記念誌の編集にあたり、お忙しい中原稿をお寄せいただきました皆様方、記念誌作成に終始ご尽力いただいた編集委員に心から感謝申し上げます。

地域医療ネットワークの会世話人
丹下 みつる

地域医療ネットワークの会

30回記念誌

平成30年2月3日発行

編 集 地域医療ネットワークの会
川島康裕／坂本由恵／丹下みつる

事務局 聖マリアンナ医科大学病院メディカルサポートセンター
〒216-8511 神奈川県川崎市宮前区菅生2-16-1
TEL:044-977-8111(代表)

印 刷 株式会社創栄企画